

— 随 想 —

釜石製鉄所と香村さん

的 場 幸 雄*

釜石製鉄所は、昭和 30 年 (1955) その創業 70 年を記念して「釜石製鉄所 70 年史」を刊行した。70 年というのは、官業が放棄されたあと、田中長兵衛氏が受けつぎ、横山久太郎氏を送つて、高炉の操業を始めた明治 18 年 (1885) からの起算であるうか。

周知のごとく、釜石地区にはその前史的な時代がある。その源流は、安政 4 年 12 月 (旧暦、太陽暦では 1858 年 1 月) の大島高任の大橋高炉の成功まで溯ることができる。今 (1983) から 125 年前である。

これらのことは、前記の「70 年史」に詳しい。

釜石製鉄所は、田中家の経営となつてから、一応の経営の目途がつくまでには大変な苦勞があつた。殊に現場を担当した横山氏の悪戦苦闘振りは、今や伝説的なものとなつている。明治 19 年 (1886) 10 月に至つて漸く、大島型の 5 t 高炉で木炭銑の出銑に成功することができた。しかもその銑鉄は、納入先の大阪砲兵工廠で品質的に高い評価を得た。以来、他への需要もふえ、釜石ではそれに応ずるため、同型の炉を増設して対応していたが、一方次の段階への発展の方策を摸索しつつあつた。

その時、野呂景義教授が、釜石鉄山及び釜石製鉄所を詳細に視察して釜石の将来についての復命書を提出した。言うまでもなく、野呂教授は当時帝大教授で農商務省技師を兼任していた人で、その復命書の中で、官業時代の 25 t 高炉を復活し、骸炭 (コークス) をもつて操業すべきことを提案しているのであつた。

田中家では、この提案を受入れ、旧 25 t 高炉を復活させる方針に踏み切り、野呂教授に技術指導を求めた。野呂教授は顧問として指導することを受諾するとともに、実務担当者として香村小録氏を推し、ここで初めて、釜石の技術の流れの中に香村さんが姿を見せるのである。明治 26 年の秋のことであつた。

香村さんは、金沢藩士の家に、慶応 2 年 (1866) の生まれで、その 2 年後が明治元年である。5 才の時父上を失い、母の手ひとつに育てられ、学校の成績は常に優秀で、傍ら近所の塾に通つて漢学、書道を学ぶ余裕があつた。このことは後年香村さんの高雅な趣味の萌芽をなすもののごとくである。

当時の青少年の志あるものは、いわゆる「笈を負つて東京へ遊学」する風があつたが、香村さんもその例にもれず、最初 17 才の時上京したが病気のため挫折、2 回目、明治 16 年末に上京、大学予備門への入学試験に必ずべく、神田猿樂町の英学校に通学、翌明治 17 年の入学試験に合格された。

明治 19 年帝国大学令が公布され、それに伴つて大学予備門は、第一高等中学校となり、香村さん達は明治 21 年その第 3 学年に編入されて法、医、工、文、理の 5 科に分かれ、明治 22 年工科大学に進学、5 名の級友とともに、採鉱冶金学科を選んだ。

その動機として「自伝日記」に「格段の動機によるに非ざるも、地下の宝蔵を開発するは、国富を増進する一大基礎たるべしと考へたること、又予が家は金の字に縁があり、且つ予は火性なる故、能く金を溶かして精錬に成功すべしとの迷信もありたる為めなり」と記してある。

同級には、今泉嘉一郎、服部漸氏等があり、それらの人々に伍して成績は常に優秀であり模範的な学生であつたらしく、運動としてはテニスに興じ、余り丈夫でなかつた自分が健康を維持し得たのは、テニスのおかげだと書いておられる。

先生は前に書いた野呂教授で、香村さんは、ここでその生涯を運命付けられた恩師に出逢つたわけである。

香村さんは明治 25 年に卒業して直ちに農商務省の役人となり、1 年余りで翌年の秋、釜石に赴任するわけであるが、この短い間に、日本鉱業会誌に 2 篇の論説を寄せ、また上司高山甚太郎氏と連名で、耐火材料に関する長文の報告があり、更に同級の今泉氏と共著で、大学で聴講された講義を整理されたと覚しい「鉱山測量術」を単行本として発刊されている。これらは、若き日の香村さんの精進振りを如実に語るものと言えよう。

香村さんが釜石に着任されたのは、明治 26 年の 9 月で、その頃釜石にあつた高炉は、大橋に 2 基、鈴子地区に 3 基で、他に官業時代の放棄されたままの 25 t 炉 2 基があり、この 25 t 炉を復活させるのが香村さんの最初の仕事であつた。横山所長を助け、野呂先生の指導を受けながら渾身の努力を傾けられたことであろう。工場内を整備し、旧施設を補修し、原材料を確保し、品川硝子工場から中島宣氏を招くなど、諸般の準備に約 1 ヶ年を費して、明治 27 年 (1894) 11 月の火入れを迎えた。最初の充填には木炭を用い、やがて骸炭装入に替える計画である。点火後約 10 日で一応順調な操業状況を得、その後木炭を骸炭に替え、ここに初めて骸炭銑が得られたわけである。併し、当時の操業記録が見つからないので、本当に骸炭銑と言えるものが得られた年月は定かではない。文献に依りまちまちで、芹沢正雄氏は、広く諸般の事情を検討して、明治 28 年 (1895) 8 月と推定され、私もそれに従いたいと思う。それはともかくとして、明治 27 年 11 月に香村さん等に依つて火入れをされた 25 t 高炉によつて、わが国としては初めての骸炭銑が得られたことは事実であろう。

これは英国でダービーが、初めて骸炭を高炉に用いて成功したのは 1735 年とされているから、それにおくれること約 160 年ということになる。今日のわが国の高

* 東北大学名誉教授

炉を思えば、感無量である。しかしその端緒は、釜石製鉄所において、野呂教授の指導をうけた香村さん達の努力によつてなされたのであつて、わが国の製鉄技術史上ひとつのエポックを作つたものである。

そしてまた、当時朝野の問題となつていた「製鉄事業法案」の議会承認の機は熟してはあろうが、釜石におけるこの成功が何程かの起爆的効果を持つたとも言えよう。事実「法案」はその直後、明治 29 年春の議会で承認され、「製鉄所官制」の公布となり、国として製鉄事業へ本格的な進出となるのである。

その頃まではいまだ旧法による鉄鋼の産額の方が多かったが、この成功を機として逆転し、従つてそれは技術上の成功だけに止まらず、一般工業界、経済界等へも何かと影響が多かつたものと思われる。

政府は、製鉄所建設のための技術視察使節を欧米諸国に派遣したが、香村さんは田中家の好意により、それに参加同行して明治 29 年から 30 年にかけて一年間程、先進各国の製鉄業を視察して釜石に帰つた。明治 30 年からは香村さんの後輩仲大路氏道氏も加わり、次々に工場の整備拡充に努めてゆく。

精鉄炉で銑鉄を精製して高級銑をつくつて主として軍需に応じ、明治 33 年からは 5t 高炉で、鏡銑、満庵鉄等の鉄合金を製造した。これもわが国としては初めての試みである。明治 34 年には八幡の第一高炉の初操業を援助するため釜石より熟練工を派遣し、明治 35 年からは水道用鉄管の鑄造を開始、翌年には官業時代の鍊鉄工場を改装して 5t 平炉 2 基の平炉工場とし、圧延工場を復活して棒鋼を圧延して、わが国民間として初めて一貫工場を実現させた。また同年から 60t 高炉の建設を計画して明治 37 年火入れを行つて順調な操業に入つた。

謙遜な香村さんは、これらの業績はすべて恩師野呂先生の御指導によるものとしておられるのである。

また香村さんの釜石における業績をみて、将来製鉄業に参入の意図を持つ方面から招聘の話も幾度かあつたらしいが、田中家への信義を重んじて耳を傾けなかつたと言われる。

明治 40 年東京本社に転勤、高所から技術の大纲を指導し、絶えず各地の鉱山、製錬所等を訪問し、また官民諸種の委員会の委員等を委嘱されるなど、その活動の輪は次第に広げられて行くのであつた。鉱山懇話会編「日本鉱業発達史」(昭和 7 年)の第 3 篇「製鉄業」は香村さんの執筆に成るもので重要な典拠とされている。大正 4 年には博士会の推薦によつて文部省から工学博士の学位を授与された。

欧州大戦後の不況に当たり、田中製鉄所は経営危機に見舞われ大正 13 年遂にその経営を三井に委譲するので

あるが、その交渉にはすべて香村さんが当たられ、その大局をみる明知と温雅にして信義に厚い人柄により、すべては円滑に運ばれたと聞いている。

三井時代の香村さんは、その釜石鉱山株式会社の役員として本社に在つたが、大正 14 年(1925)俵国一教授の仲介により、白系ロシヤ亡命客スカレドフ氏の設計になる平炉を導入した。これはわが国における平炉の蓄熱室や燃焼口の改良考案に就いての先導的な役割をなすものであつた。

昭和 9 年の製鉄合同に当たつても奔走されるところがあり合同後の日本製鉄株式会社の役員として重きをなした。

日本鉄鋼協会は、大正 3 年 6 月、野呂、今泉、香村、俵の 4 氏がその結成について下相談をされ、のち服部氏を加えて 5 氏が主唱者となり、大正 4 年 3 月、創立総会が持たれたものである。香村さんは初代理事の 1 人であり、第 3 代(大正 9. 4~11.3)の会長である。

「香村賞」は、昭和 7 年 4 月香村さんが寄せられた基金によるものである。香村さんは協会の運営については常に深い関心を持たれた。講演会等は常に出席され、私も末席からはるかに、上席で熱心に講演に聴き入つておられる香村さんを望見した記憶がある。

香村さんは、昭和 13 年 3 月、73 年の輝やかな技術者・経営者としての生涯を閉じられた。その業績はその時代として常に先駆的で、しかも手堅いものであつたと思う。

その一周忌に「香村小録自伝日記」を、令息香村春雄氏が私家刊行されて知友の方々に配布された。私はこの稿を書くに当たつて令孫香村保文氏(新日鉄本社勤務)から拝借して通読させていただいた。

その手ひとつに育てられた母上に対する深い敬慕の情と孝養、平和な明るい御家庭の有様などが、簡潔な記載の裡に躍如たるものがある。又家族の方々と旅行を好まれその足跡は全国に及んでおり、家庭にあつては謡曲、日本画、短歌、俳句、漢詩等々、高雅な幅広い趣味をたのしまれたようである。

香村さんは、外にあつては明治期の鉄鋼技術史に残る数々の仕事をされたが、また家庭の人としては、暖かい頼り甲斐のある家長であつた。私は敬慕止まぬ心情をもつてこの稿を終わる。(57. 12. 31)

追記 本稿を起草するに当たつて、東工大飯田賢一教授、鉄鋼技術情報センター青木 武氏、釜石製鉄所村上雅昭氏、新日鉄本社山村良彦氏、東松良光氏に種々御教示をいただいたことを附記して御礼申し上げる。